

この世界だけは勘弁してください（白目）！

ジャック・ザ・リッパー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リハビリ作品です。期待しないで下さい。

神様転生、人生をやり直してチート無双からのハーレムをするだけの簡単なお仕事です。でも、それは可愛い子の多い平和な世界に限ります。主人公「転生先はIS?それって剣一本で世界を制したお姉ちゃん（修羅）とか、木刀で木製の扉に穴を開けたり常に刀を持つたりして幼馴染（人斬り）とか、国際的に宣戦布告してくるイギリス人（狂）とかいる世界だよね?確かに皆可愛い子だけど、その世界だけは勘弁してください（土下座）!」

神『嫌です（笑）』主人公は、生き残ることができるのか?

第
1
話

目

次

1

第1話

僕の名前は、守崎籌。どこにでもいる普通の小学生だ。

嫌、正直なところ普通ではない。僕は、転生者と呼ばれる存在なのだ。先ずは、僕が転生した経緯を説明しよう。

神『君には、これから転生してもらう。』

← 僕「やつたー！チート転生だー！」

神『チート？知らんな。そんなものをやる気はない！』

← 僕「ええっ！そりやないよー！」

神『転生先は、《インフィニット・ストラトス》の世界だ！』

← 僕「えっ！あの理不尽な暴力が振るわれることで有名な、あの世界ですか!?その世界だけは勘弁してください!」

神『拒否権は始めからない、逝つてこい。』

← 僕「(；Д；)」

こうして、僕はめでたく理不尽な世界に転生しましたとさ。めでたくないめでたくない。

僕のクラスには、剣一本で世界を制した修羅になる姉を持つ弟と、マツドサイエンティストで人格破綻者一步手前な姉を持つ理不尽な暴力を振るう（木刀の突きで扉を蜂の巣にする）事で有名なブロリー系ヒロインの妹と、金髪イケメンの自称主人公を名乗る残念な子以外は普通なクラスである。

僕は、転生はしたが普通の生活がしたいのだ。

このまま普通に進学して、普通に社会人になつて、普通に恋をする。
それが僕の目的なのだ。

今の所、金髪がヒロイン（狂人）に絡む以外はそこそこ普通の生活を送っている。このまま何事もなければいいんだけどなあ。

そんなことを思つていた時期が僕にもありました。案の定、忘れ物を取りに戻つてきたら修羅の弟が教室を覗いているではありませんか。僕も教室を覗くと、ヒロイン（狂人）が掃除をしていて、男の子3人に男女と馬鹿にされました。

「やーい、男女！男女の癖にリボンなんか着けてんじゃねえよ！」
「そうだそうだ！キモいんだよ！」

「五月蠅い、私は掃除をしているんだ。」

おい馬鹿やめろ！ヒロイン（狂人）を、それ以上刺激するんじやない！ブロリーニに襲われたみたいに躊躇殺しにされるぞ！

僕は、修羅の弟に向かつて頼み事をすることにした。

「織斑、急いで先生を呼んできてくれ！このままだと、怪我人が出る！」

「えつ、でも、筈が……」

「僕が何とかする！だから速く！」

クラスメイトがヒロイン（狂人）にボコボコにされて入院なんて、冗談でも笑えない。早くクラスメイトを止めないと！

教室に入ろうとすると、男の子の一人がヒロイン（狂人）のリボンを奪い取つた。

「つ！返せ！」

「やだね！こんなもの、こうしてやる！」

男の子は、ヒロイン（狂人）のリボンを地面に投げ捨てて踏みつけようとした。僕は走った、地面に落ちたリボンに向かつて。

「待てええええ！」

リボンは、なんとか踏まれる前に掴むことが出来た。そして、そのまま踏みつけようとした足は僕の腕を踏みつけた。

「痛ッ！」

「な、なんだよいきなり!?」

「もうやめなよ！寄つて集つて、女の子を男が3人で馬鹿にして楽しいのかよ！」

「う、うるさい！」

僕はまた踏みつけられた。僕は、リボンを守るように抱え込んで丸くなつた。そして、そのまま3人に踏みつけられた。

「お前には関係ないだろ！どつか行けよ！」

「きつとこいつ男女の事が好きなんだぜ！」

「弱い癖に意気がつてんじゃねえ！」

耐えろ！耐えるんだ！僕一人が少し怪我をするくらいでクラスメイトが助かるんだ、これくらい余裕だぜ！でも、然り気無く僕がヒロイン（狂人）が好きなんだとか言わないでください、死んでしまいます。死因が、木刀による頭蓋骨陥没で。

その後、修羅の弟が先生を連れてきたことで、この騒動は終わつた。僕は、この状況の説明をしてヒロイン（狂人）にリボンを渡して保健室に向かつた。男の子3人は先生に怒られ、保護者にも怒られたそうだ。他人の罵倒する中に入るなんて無謀なことは、もう二度とゴメンだ。これからは、もっと距離をおいて他人のふりをしていよう。

「守崎君は、とつても強い子ね。」

「何処がですか？先生も見た通り、守崎はずつと踏みつけられていただけですよ？」

「篠ノ之さん、強さは力が強いとかだけじゃないの。守崎君は、篠ノ之さんのリボンが踏みつけられないように勇気を出して守ろうしてくれたのよ。守崎君の強さは、誰かを思いやることができる心の強さなのよ。」

「心の、強さ……」

次の日、席替えでヒロイン（狂人）が隣の席になった。

「篠ノ之箒だ。守崎、これからよろしく頼む。」

あの、無愛想で学校では殆ど喋らないヒロイン（狂人）が挨拶をして来た。僕の他人のふりをするという計画は、いきなり失敗となつた。

僕の希望は消えた。